

小さなまちの
古き良きを
巡る Part_1

手まり

手にする人の幸福を祈って、
農家の豊作を願って作り、飾る
世界に一つの装飾品

＊案内人＊
叶田サツキさん
(84) 大間 Kanada Satsuki



一針ずつ刺していく手まり。同じ模様でも作り手の色使いやちょっとした針のさし方で出来上りが違う。唯一無二の装飾品だ

まさきの手まり

一針一針気持ちを入れて
模様の色合いを選ぶのも楽しい



手まりの作り方

1. すくもをビニール袋に入れて固め、芯を作る。毛糸を巻き付けながら丸い形に整える。その上を毛糸が見えなくなるまで飾り糸で覆う
2. 円の中心点を決め、作る模様によって4～16等分にする。編むときの基礎となる柱を立てる
3. リリアンを使って模様を作る。先に作った柱を基準に放射線状に編んでいく。リリアンの糸を引っ張って広げながら編んでいくのがポイント
4. 色糸を幾重にも編んで形を整えていく。このとき、糸は「重ねていく」ではなく「横に並べていく」のが美しく見えるコツ。下面も同様に編む
5. 上と下をつなぐ帯を編んだら模様は完成。飾りひもを付ける中心点をとる。まち針とリリアンを使って、どこから計っても同じ長さになる位置を中心に決める
6. 中心を決めたら、かぎ針を使って帯下に飾りひも用のリリアンを通す。反対面にも同じようにリリアンを通し、房を結び付けたら出来上がり

飛鳥時代に中国から伝わったといわれる「手まり」かつては貴族やお姫様の遊具として作られていたが、江戸時代に城下にも広がり、やがて縁起を担ぐ飾り物に。その丸い形から円満な家庭を築く幸福のシンボルとして嫁ぐ娘に持たせたり、子どもの健やかな成長を願って贈られたりしてきた。

松前には古くから「手まり飾り」の風習がある。正月飾りの一つとして小正月まで、門松やしめ飾りと一緒に、柳の枝に手まりやかるといわれる球をつるしてきた。「今年も豊作になりますように」という農家の願いが込められた飾り物ともいわれている。

河川改修が進んで柳が減った今、かるやけを売る店や作り物を飾る家も少なくなった。

「友達が見よるんを見て覚えたんよ」という叶田サツキさん(84)は大間から25年前から手まりを作っている。

「贈る人、見てくれる人に喜ばれるのがうれしいけん」と微笑みながら手際よく編んでいく。

手にする人の幸福を祈って、農家の豊作を願って、一つ一つ心を込めて作る手まりは、同じ物が二つと無い世界に一つの装飾品。「出来上がりも楽しみだけど、作っている時はもっと楽しい」。

古き良き時代を今に受け継ぐサツキさんの家は、優しさにあふれている。



7. 赤、黄、緑などベースの色との兼ね合い、糸と糸の並びなどを考えながら、合う色を選んでいく
8. 手まりの中身はすくも(稲のもみガラ)。最近では、発砲スチロールの中身を使う人もいますが、サツキさんはすくもを使う
9. すくもをビニール袋に入れて糸で巻いて丸い形にしていく。お金をかけずに工夫しながら楽しむのがサツキさん流
10. 門松やしめ飾りと同じように、正月には玄関の柱に柳をしばり、心を込めて作った手まりをつるす。家庭の幸福や農家の豊作を願う

